

2026 年 9 月 30 日

能登黒瓦のカケラで松波ベンチを作ろう。**～サッカー広場から復興交流拠点へ～**

金沢工業大学の学生プロジェクトが

地元住民とともに瓦片をベンチに埋め込み、震災前の記憶を語り継ぐワークショップを開催。

10 月 18 日（日）11 時-13 時 松波酒造トレーラーハウス（石川県鳳珠郡能登町松波）

金沢工業大学では、学生プロジェクトが令和 6 年能登半島地震により被災した能登町松波地区の復興を願い、このたび、能登町松波地区のミニサッカーコートに交流・休憩のためのベンチを寄贈します。

GAPPA noto（北陸建築学生仮設住宅環境支援プロジェクト 会長：金沢工業大学 竹内 申一教授）の活動の一環で、金沢工業大学の学生による「Toiro プロジェクト」が取り組むイベントで、寄贈するベンチには、令和 6 年能登半島地震で倒壊した家屋に使われていた能登黒瓦をアップサイクルした、CACL×LIXIL×永山祐子建築設計の 3 社共同プロジェクトにて開発された新建材「textone NOTO-KAWARA（テクストーン 能登-瓦）」を使用しています。失われた黒瓦に新たな命を吹き込み、地域の記憶を未来へとつなぐとともに、能登半島地震の記憶を風化させないシンボルとなることを目指しています。

また、ベンチ寄贈にあわせて、地元の親子や地域住民、松波酒造関係者の皆さまとともに、震災で全壊した酒蔵や自宅跡地に残る瓦片を掘り起こし、その一部をベンチに埋め込むワークショップを開催します。参加者同士が震災前の風景や暮らしの記憶について語り合うことで、地域の記憶を共有し、復興への思いを次世代へつなげる機会とします。

能登黒瓦のカケラで松波ベンチを作ろう ～サッカー広場から復興交流拠点へ～

日時：2026 年 10 月 18 日(日) 11 時～13 時（雨天決行）

会場：松波酒造トレーラーハウス（石川県鳳珠郡能登町松波 30-114）

参加対象：能登町在住の小学生・中学生(親子参加も可)、松波地区住民(年齢不問)

参加登録：<https://forms.cloud.microsoft/r/fUNAqSAWn3>

※参加登録がなくてもご参加いただけます、

可能な範囲で事前の参加登録をお願いいたします。

- ・主催：GAPPA noto(北陸建築学生仮設住宅環境支援プロジェクト：金沢工業大学チーム)
- ・協力：能登町、松波酒造株式会社、株式会社 CACL、有限会社 永山祐子建築設計、株式会社 LIXIL

学校法人金沢工業大学企画広報課

電話：076-246-4784 メール：koho@kanazawa-it.ac.jp

当イベントについて

能登町・松波地区の今後の復興に向け、ミニサッカーコートに併設する交流・休憩のためのベンチを寄贈します。ベンチの座面には能登黒瓦の再生建材が利用されており、失われた黒瓦にもう一度命を吹き込み、能登半島地震の記憶を風化させない役割を持ちます。

当日はベンチの寄贈に合わせ、地元の親子や近所の方々および松波酒造関係者の皆さんと一緒に酒蔵・自宅の跡地から瓦片を掘り起こすとともに、ベンチの一部に瓦片を埋め込む作業を行いながら、震災前の記憶について語り合うワークショップを行います。



フライヤーは2次元コード
からもご覧いただけます

イベントフライヤー

https://www.kanazawa-it.ac.jp/kitnews/2026/20261018matsunami_bench_event_flyer.pdf

ベンチ制作の経緯

日本サッカー協会（JFA）が能登半島地震からの復興支援として珠洲市、輪島市、能登町の3市町へ寄贈したミニサッカーコート5基のうち1基が、能登町松波地区の松波酒造酒蔵跡地に設置されました。松波酒造から能登町へ、「子どもたちが遊びや休憩に利用できるベンチを整備したい」との相談があり、その後、能登町からGAPPA noto（北陸建築学生仮設住宅環境支援プロジェクト 会長：金沢工業大学 竹内申一教授）へ協力要請が行われました。

これを受け、GAPPA notoに参加している金沢工業大学 Toiro プロジェクト（プロジェクトリーダー：建築学科3年 金田唯翔さん／担当教員：建築デザイン学科 下川雄一教授）がベンチの企画・デザイン検討を担当しました。プロジェクト内コンペにおいて複数案を募集し、最終的に建築学科3年の金田唯翔さんと宮本和輝さんによる2案が選定され、地域との対話を重ねながら具体化を進めてきました。

ベンチデザインについて

ベンチのデザインは、GAPPA noto に参加する金沢工業大学 Toiro プロジェクトが担当し、学生によるデザインコンペを実施しました。その結果、金田唯翔さんと宮本和輝さんによる 2 つの最終案が選定されました。

■「内浦ベンチ」（金田唯翔さん案）

「寄せて集まる」をコンセプトに、松波酒造の前に広がる穏やかな内浦の海と、その水面を表す青海波模様をモチーフとした一人用ベンチです。座面には震災で被災した能登黒瓦の破片を埋め込み、ベンチのベースの素材となる「textone NOTO-KAWARA」の温かみのある色彩との対比によって地域の記憶を表現しています。また、一人用とすることで、サッカー観戦や休憩、地域の交流など、多様な使い方ができることを意図しています。

複数のベンチを組み合わせることで、人々が自然に集まり語り合う場を生み出し、復興の拠点となる空間づくりを目指しました。

内浦ベンチ concept 寄せて集まる

テクストーン（能登黒瓦の再生建材）が能登に還るナラティブに加え、松波酒造の「波」に表れている能登町・内浦の静かな水面を連想させる青海波模様をモチーフに扇形の一人用ベンチをデザインした。ミニサッカーコートでのゲーム観戦や各種イベントにおいて、目的やその時々の気分に応じて住民や子供達に多様に配置され、移ろう波のように、使う度に新たな風景が生まれるようなベンチを目指した。



能登町・五色ヶ浜海岸



青海波模様



■「貫構造のベンチ」（宮本和輝さん案）

松波地区で毎年開催される「松波キリコ祭り」と、震災で全壊した松波酒造の酒蔵建築をモチーフとしたデザインです。酒蔵や伝統木造建築に見られる「貫（ぬき）構造」をベンチの骨格として表現し、地域の歴史や文化を感じられる造形としました。また、座面には松波の「松」と「波」をイメージした意匠を施し、現地で回収した瓦片を埋め込むことで、震災前の日常や風景の記憶を次世代へ伝える役割を持たせています。地域を支えてきた伝統文化と復興への願いを込めたデザインです。



松波酒造・酒蔵の貫桶造壁（2023年撮影）
（提供：松波酒造、HAB北陸朝日放送、TOPPAN）



松波キリコ人形祭りのキリコ
（出典：<https://notocho.jp/event/568/>）



今回寄贈するベンチは、コンペで選定された 2 案の考え方を踏まえながら実施設計を行い、地域の方々との対話を重ねて完成しました。

ベンチの特徴

ベンチには、地震で破損した能登黒瓦を原料として活用した建材「textone NOTO-KAWARA」を使用しています。

「textone NOTO-KAWARA」は、株式会社 CACL と株式会社 LIXIL ならびに有限会社永山祐子建築設計の 3 社が連携し開発を進めている建材で、能登半島地震で全壊・半壊した家屋に使用されていた黒瓦を新たな意匠建材として再生する取り組みから生まれました。単なるリサイクルではなく、地域の記憶や想いを未来へつなぐ「創造的復興」を目指すプロジェクトとして展開されています。

今回のベンチでは、現地で回収した瓦片を実際に座面へ埋め込み、松波の歴史や震災の記憶そのものをベンチの一部として残します。

松波酒造について

松波酒造は 1868（明治元）年創業の酒蔵であり、能登杜氏発祥の地として知られる松波地区で伝統的な酒造りを続けてきました。しかし、令和 6 年能登半島地震により酒蔵は全壊し、現在はトレーラーハウスを拠点に事業を継続しています。今回のベンチ寄贈は、子どもたちの遊び場づくりだけでなく、松波酒造の再興と地域コミュニティの再生を後押しする取り組みでもあります。

GAPPA noto（北陸建築学生仮設住宅環境支援プロジェクト）について

令和6年能登半島地震の被災地に建設された仮設住宅地において、居住者の方々の安らぎのある住環境と豊かなコミュニティの形成を支援することを目的に、2024年5月に発足した学生による支援団体。GAPPA（がっぱ）は石川県の方言で「一生懸命になる」という意味です。

北陸三県の建築系学科のある大学・高専の研究室を単位としたチームが連携し、各仮設住宅団地の居住者の皆さんとのコミュニケーションやワークショップを通じて、モノ・空間・環境をつくる「モノづくり」と、出来事・活動・イベントをつくる「コトづくり」の両面から、豊かな生活環境と暮らしをつくるお手伝いを行っています。

金沢工業大学の建築学科の学生たちの課外活動団体「Toiro プロジェクト」も GAPPA noto の活動に参画しています。

本事業の目的

本事業では、

- 被災した黒瓦の再活用による震災の記憶の継承
- 地域住民が集い、交流できる場の創出
- 子どもたちの居場所づくり
- 松波地区の復興とコミュニティ再生への貢献
- 次世代への地域文化・歴史の継承

を目指しています。ベンチが、人々が集い、語り合い、地域の未来を育む新たな場となることが期待されています。